

## 明治の政治に及ぼしたジョージ・ワシントンの影響

著者	木村 毅
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	6
ページ	14-30
発行年	1953-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/9889">http://hdl.handle.net/10114/9889</a>

# 明治の政治に及ぼしたジョージ・ワシントンの影響

木村

毅

私は藤井先生のように講演を第一、第二というようにきちんと組織的にすゝめられるように準備して来ています。大体ここへ風呂敷包を持つて来るというのが、無準備をばかして資料をここで読まうという考えなのでありますから、そのつもりでお聞きを願いたいと思います。藤井先生は、随分永い間私は御懇意に願つておるのであります。先生のことを非常によく存じ上げておる一面もありますし、又存じ上げない一面もあるのであります。もと／＼明治の歴史、維新史というものは吉田東伍博士などが早くから着手しておられたのでありますが、維新史というものを學問にされたのは藤井先生が最初だという話を聞いたことがあります。藤井先生はもと京都大学で維新史を講義しておられたのであります。そして非常に立派な本がたくさん出ておりまして、殊に憲法の制定史の著述はこの方面の専門家である尾佐竹博士の「維新前後に於ける立憲思想」という研究の序文に「恰もよし畏友文学士藤井甚太郎君が、その専門の立場から帝国憲法制定史を研究しつつあるのに際会し、異なる立場ではあるが、その帰着題を一にする同志のあるのを喜んだのである」とかき、又「考証該博真に近來の大論文である」とかいて藤井先生のアルバイトを非常に高く評價しておられたのであります。

今日は先生も古稀の祝いなので、不精なる先生が珍らしく顔を剃つて鬚もあたつて来ておられるようであります。が、（笑声）平生の藤井先生は我々の接する限りにおいては鬚も伸びたままにしておられることが多いのであります。その顔を見ておりますと、藤井先生の顔は非常にスターリンの顔によく似ております。私は日本の人の中でスタ



ーリンによく似た人は藤井先生とそれからロシア文学をやる昇曙夢さんだろうと思うのですが、やはり顔がスターリンに似ておられるくらいなので非常に反逆的な反抗の精神が早くから強いんじゃないかということを考えるのであります。スターリンが書いたものとみると、あれは著作はまるつきり下手くそでありまして、レーニン主義の研究などというものは読まれたものではない、誰かの言つたことを継合せておるので、自分の独創の見解なんというものはこれつぼつちもない。非常につまらない研究であります、そこへ行くと藤井先生の学問には独創の見解があらわれている。私はまだ学生の時分でありましたが、先生が徳川慶喜が維新のときに京都の二條城を捨てて大阪に帰つて行つたときのことを書いておられたものを讀んだ。なぜ慶喜は政治の渦巻の中心である京都を捨てて大阪へ歸つて行つたのか又なぜ明治の新しい政府が、慶喜が大阪へ歸つて行つたのを虎を野に放つが如しと言つて恐れたかということを書き書いておられた。先生はこれは要するに大阪の経済的な力と言いますか、物質的な勢力に重きをおいたので、徳川慶喜も大阪さえ握つておれば、経済的にあそこは非常に富裕な所であるから何とかなるという氣持がありましたし、又朝廷の方で見ますと、慶喜に大阪に行かれては非常に経済的に富裕な所にあいつがいるのだから本当に恐ろしいことになるというので、それを警戒した。そういうことを藤井先生が言つておられたのを子供のときに読みまして、成るほどそうかなあとひどく感心しました。今ならばこういう経済的な見方をすることは学問の常識になりましたが、我々の子供のときには大変珍らしかつたので、今でも忘れずにあります。それからこの先生の學問が如何に正確であるかということは、先ほど団琢磨の伝を先生がここでお話になりましたが、この団琢磨さんがアメリカから歸つて、やはりすることがなくて大阪の英語学校の先生をやつておる。そのときに、どの団琢磨の伝記を讀んでみても、そのときの学生に後に總理大臣になつた幣原喜重郎なんか習つたのだということが書いてあります。ところが實際にはそういうことはあり得ない。団氏は明治十四年に大阪の英語学校の先生をやめております。幣原喜重郎があの学校に入つたのは明治十六年になるのです。だから二九年間ずれがあるので、団琢磨が幣原を教えたなんということはこれはあり得ないことであります。それを私が見た範圍ではどの本にも書いてあるのであります、さすがに藤井先生の団琢磨にはそういう与太なことは書いてない。大した重要なことでないが細かいところまで一々ダメ



を押してたしかめておられるので、そういう点でも非常に敬服してゐるのであります。今日はその先生の記念の講演会だということで喜んで参りました。

## 二

私の題は「ジョージ・ワシントンの日本に及ぼしました政治的影響」というのでありますが、なぜ政治的という言葉をつけるかといいますと、ワシントンの及ぼしました影響には政治的でないものがある。例えば道徳的なものがある。ワシントンが子供のときに庭の櫻の木を伐つて、親父が非常にそれは大事にしてゐる櫻の木だつたので、誰が伐つたかという、正直にワシントンは自分が伐つたんだということを言つた。これはナショナル第二読本にも書いてあります。私なんか子供のときから習つてゐるのであります。これは人間正直であれということをお教えるので、まあ早く言いますと道徳的影響を与える。私はその影響を受けたかどうか分りませんが、あの話に感奮して正直になつた人もないと言えない。尤もこの話は嘘でありまして、今誰もアメリカでこれを信ずる者はありませんが、一時は道徳的影響を与えるため日本でも読本にこの話を採用していた。それから例えばスポーツのほうの影響もあるので、私たちが子供のときに非常にはやつた歌にワシントンの歌がある。「天は許さじ良民の、自由をなみする虐政を、十三州の血はほとばしり、ここに立ちたるワシントン」というのであります。慶応義塾の、早慶戦当初つまり明治三十八九年頃の応援歌を見ますと、「天は晴れたり気は澄めり、自尊の旗風打靡く、城南健児の血はほとばしり、ここに立ちたる野球団」という歌があります。（笑声）我々が子供のときには慶応の野球団はこれを歌つておつた。これをしても影響というならば、これはジョージ・ワシントンのスポーツ的影響なのであります。併し私がここでお話ししようとするのは、その道徳的影響やスポーツ的影響でなしに、政治的影響なのであります。なぜそういうことを申し上げるかと言いますと、藤井先生の最も代表的な著作の一つは、日本の憲法の制定史でありますから、その前史をさぐるというような意味でこういう題を掲げてみたのであります。

そこでこのジョージ・ワシントンが政治的に影響を持つて来るまでに一体日本人が彼のことを知つたのはいつだつ



たであろうかということを考えてみますと、徳川の中期にヨハン・シドツチというイタリヤの宣教師が日本にやつて来まして、新井白石が訳問の役にあたつてゐる。その始末をかけた「西洋紀聞」という書物の中にはノールド・アメリカ、すなわち北アメリカのことが書いてあります。併しこのときはアメリカが独立するより五、六十年前のことです。ありますから、ジョージ・ワシントンのことは、もちろんあの新井白石の「西洋紀聞」には出て来ない。文政十一年（一八二八年）に西洋文化輸入のために大恩人であるシーボルトが日本に来ました。本来なら彼等は出島のオランダ館から出ることはできないのでありますが、何年に一遍か江戸に参府をいたします。そのときにシーボルトが江戸に来て蘭学の総本家の桂川甫周その他の先生と相来往しました。そのとき幕府の天文の家高橋作左衛門にシーボルトは、アメリカでは革命が起つてワシントンが大統領になつたという話をしたということが伝記に書いてあります。それを年表で繰つてみますと、丁度アメリカが独立の宣言をいたしましたから四十二年経つて、日本はジョージ・ワシントンの名を知つたことになる。まあ私の調べた範囲ではこれが一ばん古い。それからアメリカのことはいろいろな本が出てゐることは、さつき藤井先生が非常に多くの本の名前を擧げてお話しになつた通りであります。しかしこれらの本には大体においてワシントンのことは出ておらんのであります。それではシーボルト以来において、日本人がワシントンのことを知つたのは何からであるかと申しますと、先ほど藤井先生のお話に土佐の福岡孝悌が三権分立のことを明治の初年に知つておつたというお話がありました。福岡孝悌が何によつてその三権分立のことを知つたかといひますと、藤井先生のお話に聯邦志略という本で知つたといふのである。この聯邦志略といふのはここに持つて来たのであります。この本なのであります。〔本を示さる〕アメリカのブリッジメンといふのが支那へ行つて漢文をならつてアメリカのことを書いて、向うで出版をいたしましたのであります。これはこの元のままでちよつと私には読みにくい、そこで私はこの日本で翻刻されて眞作が返点を打つた本を買つてあるのでありますが、この聯邦志略は、元の本は天保年間に支那で出ているのであります。それが日本に入つて来ていろいろ／＼な人がこれを読んでおりますし、和文の翻譯も出てゐるのであります。これにワシントンのことが書いてあるのであります。先ほど藤井先生のお話にありました通りにこの本に三権分立のこともちゃんと書いてあります。ワシントンのことはどう書いて



あるかと言いますと、ここに割注がしてありまして「乾隆の五十四年聯邦初めて君を立つ」、大統領という訳語がまだありませんから、君主という字にプレジデントと仮名をふつてあるわけであります。「君を立つ、初めて位を踏む者をワシントンとなす、両任を経」と書いてあります。両任というのは二期勤めるということでありますが、これによつて大体において日本人はアメリカの共和政治であるとか、三権分立の組織であるとかいうことを知り、初代の大統領にはワシントンが立つたということをも知つたわけでありますが、この聯邦志略にまだ大統領という言葉は使つてない。皆各州の知事（ガヴァナア）は君という字が書いてありまして、その上に君主がいてそれはプレジデントだと説明している。まだ大統領というような訳語は出来ていない。それからいろんな本にぼつりぼつりとワシントンのことが始めてあるのですが、併しまだこのワシントンの持つておる思想が日本に影響を与えているところまではなかなか来ない。

先ほど藤井先生が土佐の漂流民の中浜万次郎のことをお話になりました。あの中浜万次郎がワシントンの伝記を持つて帰つたというお話がありました。私はこれはうつかりして気がつかずにおりました。実は中浜万次郎はあの当時アメリカの雑誌をいろいろ持つて帰つておりましたが、その雑誌の名前などで皆わかつております。私は学校でよく日本のジャーナリズムの講義をするときに、アメリカの雑誌が入つて来たのはこれが初めてというのでよくあそこを講義したので中浜の伝記は読んでおくせに、ワシントンのことはつい見落しておりましたが、まだまだ中浜万次郎のアメリカの事情に対する認識というようなものは極めて曖昧なものでありまして、中浜万次郎の漂流記には、これは長崎の奉行所で取調べてそのときに言つたのでありますが、「一、アメリカ国の政治は大抵日本に同じ、十二カ條の法令書ありて煩わしきことなし。一、王は七人あり。」（これはちよつとおかしいのですが）そのつぎに「北アメリカを三十六カ国に分つ、時候は日本に同じく四季あり、春夏秋冬あり。」ということ。」「風俗は他府国に同じ。王に國中の賢人を選出し四年持なり。」というのは大統領の任期は四年であるということです。「至つて賢なるものは八年持つという」非常にいい大統領は八年持つ。実は余りよくないトルーマンのようにワースト、最悪と言われた大統領でも二期を勤めておりましたから、至つて賢なるばかりでもありませんが、至つて賢なるは八カ年持つという。



往来には一名くらいにて而も軽げなり。」というのは大統領が出入するのにも従者は一人しか連れられないで、日本のようにたくさん行列を連れては歩かない、極めて軽くみえるというのです。アメリカの政治の組織を中浜万次郎が見て来ているのは大体においてこの程度なのであります。ところが福沢先生や勝海舟がだんだんオランダの本をよく読むようになって来ますと、次第にワシントンのこともわかつて参りまして、万延元年に、万延元年といひますとえらい古いことのようにあなた方はお考えになるかも知れませんが、そんなに古いことじゃない。私の父などは万延元年の生まれでありますが、その万延元年に日本の使節がアメリカへ行つた。そのときに咸臨丸という百何十トンくらいなぼろ船で太平洋を大膽にも渡つて行つたのであります。あのときの軍艦の総大将が木村毅という、私と同じ名前であります。私の娘が女学校で歴史を習つたときに家へ歸つて来て、お母さん、今日は非常に不思議なことがあつた、家のお父さんと同じ名前が出て来た、という話をしておりましたが、とにかくそのときの木村毅が、私じやありませんが、（笑声）軍艦の総大将であり、軍艦の艦長は勝海舟だつたのであります。福沢先生などはこの木村攝津守の従者として向うへ行かれた。木村毅は福沢先生をお伴にしているのだからエライ者であります。福沢先生の自伝を読んで御覧になりますと、「アメリカへ行つて来ても、日本と非常に違つてわからんことだらけである。一体ジョージ・ワシントンの子孫はどうしているかと聞くと、何でも娘が一人あつたという話だが、今さあどうしているか、誰かと結婚したという話だというので、こつちでは源頼朝の子孫とか徳川家康の子孫ぐらゐに思つてゐるから、その子供のこともなんかちゃんとわかると思つてゐるのに誰もそんなことはてんで問題にしておらん。実に日本と国情が違うのでびつくりしておつた」と福沢先生が言つておられたくらいでありますから、とにかく福沢先生はジョージ・ワシントンのことを向うへ行つて、すぐワシントンのことを聞かれたくらいであるから相当に御存じである。

### 三

それから勝海舟もワシントンのことを知つておつたに違ひないのでありますが、歸つて来ますというと肥後の横井小楠が勝海舟のところにやつて来て、海舟から横井小楠にアメリカで買つて来たナイフをみやげにやつておるので、



横井小楠から「亜国より御持越之御小刀捍領御厚情不淺忝候長く重宝可仕候」という手紙が行つたことがあります。が、そのときに横井小楠が一体アメリカの政治はどういう政治であらうかということを聞きました。そうすると、勝海舟が大統領は民選で初代のワシントンは二期つとめ上げるとマウンドバーノンに帰つてしまつて三期は務めなかつたという話をしたらしい。そこで横井小楠が成るほどそれは「堯舜時代と同じことですなあ」ということを言つてえらく感歎した。戦後の学生のあなた方は恐らく東洋史なんかおやりにならないので堯舜といつたところでおわかりにならんかも知れませんが、（笑声）支那の十八史略などという書物を読んでみますと初めのほうに出る。堯といつて非常に立派な帝王がいた。私も余り漢文をやらないので忘れてしまいましたが、ともかくもこれが理想的な善政をしいた後で、天子の位を自分の子には譲らないで舜が一番いいからというので舜に譲ります。ところが舜は堯の子に遠慮をいたしましてどこか田舎のほうに避けて隠れるのです。しかし国中の民が堯の子供のところに行かないで、皆舜のところを慕つて行くので、人心の向うところは舜にあるということがわかつて舜が王様になる。堯舜は聖人の「まつりごと」といわれるので「帝堯ノ世、天下大ニ和ス。百姓無事、老人アリ、土ヲ打チテ歌フ。日出デテ作シ、日入リテヤム。井ヲウガチテ飲ミ、田ヲ耕シテ食フ。帝力我ニオイテ何カアラシヤ」と書いてある。実にいい政治で、吉田内閣みたいに国民から飽きあきされたというのは非常に違う。（笑声）それから舜がいよいよ位を退いたときにもやはり自分の子に譲らないで禹に譲つてゐるのであります。併しこれは何しろ三千年も四千年も大昔のことなので、一つの伝説のようであつて誰も余り本当にはしてない。余り理想的過ぎる。併し日本の儒者は唐虞三代と申しまして、この三代のことを特に非常にユートピアのような理想的な政治が行われておつたように考えてゐるのであります。併し支那というのは非常に法螺を吹く国でありますから、（笑声）支那の李白の詩でも「白髮三千丈、愁に縁りて個の似く長し。」とか或いは李白ノ一斗詩百篇とか言われて、酒は一斗も飲む詩は百篇も作るというので、大した法螺吹きな国であります。だからこの堯舜時代、唐虞三代も法螺かも知れません。それで儒者もこれを理想国とはしておつても余り本気には信じなかつたろうと思つてあります。ところが横井小楠の思想はこれは実学と申しまして、小楠はそういう法螺の学問が非常に嫌いなのです。とにかく学問というのは實際に生かさなければ学問の値打は



ないという考えだったのでありますが、勝海舟がアメリカから帰つた話を聞いてみますというところ、ジョージ・ワシントンには自分が大統領を二期勤めるとその次にやはり国民から選ばれた者にその位を譲つてしまつてゐる。それから又それはその次に憲法起草したジェファソンに譲つてゐる。これを聞いてアメリカという国は現代の堯舜の国だと理解して横井小楠は非常に感服をした。この勝海舟から横井小楠がアメリカの共和政治のことを聞いた話は海舟座談という本に出ている。これは私はここに岩波文庫を持つて来ましたが、勝海舟の座談にも二、三の異本が出ておりまして、一番有名なのは氷川清話という本ですが、あれにはこれと同じ話が出ております。だが肝心かなめの「堯舜の政治だ」という文句が抜けてありますから、あれをお読みなつたのでは肝心かなめの話が出て来ないのであります。それから改造社から勝海舟の全集が出ておまして、あれにもこの話が出てゐるが、やつぱりどういうわけか堯舜の肝心かなめの文句が抜けてゐる。それはどうしても編集者の頭がだめだからだと思ふ外ない（笑声）さて岩波文庫の「海舟座談」を読んでみますというところ、これは勝海舟が自分で話をするのでありますが、「小楠は替間の親爺のような男で、何を言うのやらとりとめがなかつた。維新のとき大久保でさえそう言つていた、小楠を呼んでみたが意外だつた、と。大概の人にはわからなかつた。併しえらく悟りのいい人で、途方もなく聰明な男であつた。俺がアメリカから帰つて来たときいろいろ向うのことを話すと、一を聞いて十を知るといふ按配で、ははあ、堯舜の政治だ、と言つた。」とこう語つてゐる。この「堯舜の政治だ、と言つたよ」と書いてあるところが非常に大切なのであります。これで横井小楠はアメリカの政治といふものこそ現代の理想的な政治だと思ひましたわけでありまして、それで横井小楠の書いた詩を読んだり、或いは小楠の手紙を見たり、文章を読んだりしておりますと、じかにワシントンの名をあげて語り、或いはワシントンと名前は書いてなくてもそれを詠じたに違ひない詩がいろいろと出て来るのであるであります。それであなた方が御存じの通りにこの横井小楠は終いには天皇を廃止するといふことを言出し、共和政を布くといふことを言出したといふので、私は郷里が岡山県でありますが、岡山県の津下四郎左衛門といふのに京都で殺されて、首を斬られてしまつたのであります。で、あなた方は若い学生の方が多いで余ほど明治の古臭い古文書なんかは読みにくいであらうと思ひますから、横井小楠が共和思想を抱いておつたといふことのために殺され



たという事情を知りたいと思いましたら、森鷗外の書いた津下四郎左衛門という小説があります。

これをお読み下さればいいのでありまして、森鷗外の弟さんに森鷗次郎さんという人があつた、それが医科大学へ行つておつて、これは三木竹二というペンネームを用いた有名な劇評家ですが、鷗外がその人に、お前のクラスに話せる男がいるかというところ、二人いる、一人はKというので名前は書いてありませんが、もう一人は津下鹿太というので、そこで鷗外が兄貴ぶつて、それを俺のところへ連れて来いというので、三木竹二さんが森鷗外のところへその津下鹿太を連れて行つた。どうも非常に口数の少い男で、鷗外も無口ですから殆んど二人とも何にも言わないで対坐しておつた。そうして津下鹿太は鷗外に、いろいろと自分の素性を話さずに、手紙を往復しておつたのですが、一年後になつて実は父津下四郎左衛門のことを小説に書いて貰いたいというので、鷗外のところへやつて来て話をした、それをその通りに鷗外が書いたのが、この津下四郎左衛門という小説なのです。小説といつても本當の話なのであります、非常に面白いものでありまして、これは横井小楠が共和思想を抱いておるというので、津下四郎左衛門がこれを殺しに行く経路が書いてある、「横井は政治の歴史の上から共和政の価値をみとめて、アテネに先立つてと数百年、堯舜の時に早く共和政があつたと断じたが、共和政を日本に行なおうという意ではない」という一節が鷗外の小説の中にある。この堯舜を共和政と断ずる根拠は、小楠がワシントンのこと、乃至はアメリカの政治組織によつて、それから類推したこと申すまでもない。そういうわけで横井小楠は共和思想を抱いておつたこととは一般に世間で信じられていた。実は確か横井小楠の妹さんは、徳富蘇峰先生のお父さんの徳富洪水翁の奥さん、つまり蘇峰先生のお母さんだとおぼえておりますが、そこで横井小楠と徳富さんとは親戚になるので、何しろ徳富蘇峰先生は皇室中心主義という言葉で自分で作出したほどの人でありまして、横井小楠が共和思想を抱いておつたということを書くのは遠慮されて、そんなことはないということをしはしば言つておられるのであります。成程小楠の書いたものには、沢山勤皇思想的なものもありますが、併し私自身は、横井小楠は確かに或る意味で共和思想を抱いておつたに違いないと思う。その証拠には、小楠に有名な詩があるのであります、その詩にこういことが書いてある。



人君は何ぞ天職ならん

人の君、帝王となるのは決して天職じゃない。

天に代つて百姓を治む

天徳の人に非ざるよりは

何を以て天命に叶わん

君は、百姓（人民）を治めるのであるから、天の徳を備えているような人でなければ天の命令を代行することはできませんのである。そこで、

これ堯を以て舜にゆずる所以

堯が舜にゆずつたのはここである。

是真に大聖と為す

これでこそ本当の聖人の政治だという意味であります。

迂儒は此の理に暗く

むずかしい漢字の本ばかり読んでおる阿呆の学者はこの理に暗くて、

之を以て聖人の病とす。

聖人はこんなことでは心外千万だと思えるだろう。

嗚呼血統論

豈是天理の順ならんや

とにかく天の徳を備えておる天徳の人なら帝王になつてもいいけれども、血統を以て帝王になるというのは、これは天の理に背くものだということを言つておる。ジョージ六世が死んだからエリザベス二世が王冠を戴くというのは、ああこれ天理の順ならんやというので、そういうようなことは正しいことではないということを、横井小楠はこの詩で言つておるのであります。その外にも小楠がワシントンのことをいろいろと書いておるのは沢山ありますが、



小楠の弟子に井上毅という、学者があつた。これは私と同じ名前を書くのでありますが、苗字は違いますけれども、この井上毅が、横井小楠の沼山の塾へ尋ねて行つたときに、二人で話をした、その筆記が、沼山対話というのに載つておるのでありますが、それを見ますと、横井小楠はこういうことを言つておる。「真実公平の心にて、天理に法り、此割拠見を抜け候は、近世にてはアメリカ、ワシントン一人なるべし。ワシントンのことは、諸書に見え候通り、国を賢に譲り、宇内の戦争を息むるなどの三個條の国是を立て、言行相違なく是を事実踐み行い、一つも指摘すべきことは無之候」と、井上毅に教えておるのであります。まだほかにも小楠がワシントンのことを言つたのは、いろいろ詩文がありまして、ワシントンを「白面碧眼の堯舜」といつている。それほど横井小楠はワシントンに傾倒しておつたのであります。予言者は国に容れられずと言いますか、熊本藩の役人からは相手にされないで、越前に松平春嶽という偉い殿様がおりまして、これが小楠を師賓の礼をとつて越前に迎えた。そこで小楠は向うに行つて、いろいろと偉い弟子を沢山養成いたしました。橋本左内であるとか、由利公正だとかいうようなのは、そのとき小楠が鍛えこんだ弟子であります。そのうちにとうとう明治の維新になつたのであります。勤皇の各藩から政治を執るといふので、いわゆる参与といふものが京都に集つて、どういふふうな政治を執つたらいいだろうといふので相談をやつた。ところが長州は、四年前、蛤御門に大砲を放ちかけたのでありますから、長州の人間は国賊であるといふので、全然入京も許されなかつたのであります。それがいざ王政一新になると、長州が勤皇の功第一の藩であるといふので、非常に朝廷の寵遇を蒙つた、どうもこれでは一体長州が賊であつたのか、或いは本当に勤皇の功第一の藩であつたのか、人民にわからんではないか、国民が帰向に迷う。そこでここに一つの指導精神といふものを行ち樹てなければならんということがみんなの間に言われたのであります。丁度広川弘禪が吉田のほうに一生懸命になつておつたのが、いつの間にやら鳩山のほうに行き、鳩山の忠臣を以て任じておつて、口を開けば鳩山先生／＼という大野伴睦が、いつの間にやら衆議院議長になり、国務大臣になつておる、或いはこれも三十年来鳩山に仕えておつたという安藤正純が、これ又いつの間にやら、鳩山派を去つて、そうしてこれも国務大臣になつておる。これでは實際どれが本当なのやらわからない。丁度明治の維新のときがその通りでありまして、長州が賊兵なのやら、本当に維新第一の功



藩なのやらわからんから、ここで一つの指導精神を作らなければならん、兎に角新政府の政治の諸大綱を定めて置かなければならないと云うことが、明治政府の大官連中の間に問題となりました。この辺は藤井先生や尾佐竹先生の研究の中心眼目なのでありますが、その時越前から出た由利公正が相国寺のそばの自分の下宿に帰つて、鼻紙みたいな、塵紙みたいなものを取り出して書いた、これが五箇條の御誓文の文案で、これは今日原物が残つておるのでありますが、第一案はこうです。

一、庶民志を遂げ、人心をして倦まざらしむるを欲す

一、士民心を一にし、盛に経綸を行うを要す

一、智識を世界に求め、広く皇基を振起すべし

一、貢士期限を以て、賢才に讓るべし

一、万機公論に決し、私に論ずるなかれ

すべては討議で正々堂々とやつて、闇取引をしてはならんというのでありますが、この由利公正の原案によりまして、この五箇條の御誓文の一番初めに、「庶民志を遂げ、人心をして倦まざらしむるを欲す」ということが書いてある。これが何故一番初めになつておるかと言いますと、私が考えますに、ピールというもの、庶民というものを認識し、本当にこれを擲んだのは横井小楠が最初じゃないかと思う。その横井小楠にきたえられて、その思想を非常に受け継いでおる由利公正であればこそ、ほかのことは何を措いても先ず、「庶民志を遂げ」という、ピールというものを一番に取り上げておるのであります。尤もこれは後になつてから福岡孝悌や木戸孝允が直しましたから、順序が狂いまして、「広ク會議ヲ興シ、万機公論ニ決スベシ」というのが維新の五箇條の御誓文では第一になつておりますが、一番最初の草案はそうではなくて、「庶民志を遂げ」ということになつておるのであります。あの五箇條の御誓文というのは、原案を由利公正が作り、先ほども藤井先生のお話にありました福岡孝悌がこれを見て筆を入れ、最後に木戸孝允が一番あとの一節だけを書き加えておる。尾佐竹先生の研究によりまして、木戸孝允がこの一節を書き加えたのは、さつき藤井先生のお話にありましたジョセフ・ヒコから与えられた史識によつて、木戸はこれ



を書き加えたのだろうということが、確かに尾佐竹先生の本の中に書いてあります。この五箇條の御誓文というのができたのも、結局を言えば、その元は横井小楠がワシントンに非常に傾倒したということ、それからもう一つは坂本龍馬が長崎に行つて、ホールというイギリス人からいろいろ憲法のことを聞いて來たその知識と、三つが綯を交つて五箇條の御誓文になつておるのであります。この五箇條の御誓文と軍人勅諭と教育勅語、この三つを明治の三大詔勅と言つたのですが、ここにゐる学生諸君は、恐らく五箇條の御誓文も讀んだことはないし、軍人勅諭は勿論讀んだことはないだろうし、教育勅語も知らないであらうが、（笑声）我々のときにはこれが明治の三大詔勅と言われておつたのであります。その中でも、「廣く會議を興シ、万機公論ニ決スベシ」という五箇條の御誓文が一番氣宇が雄大でできがいいのは、あれは結局アメリカ的思想が日本に入り込んで日本的に陶冶されたものだから、できがいいのであります。この横井小楠の弟子に元田永孚という人がありました。この人後に明治天皇の侍講と言いますが、家庭教師みたいな、今で言えばヴァイニング夫人みたいになつた人であります。夫からやはり横井小楠の學弟に井上毅という人があります。それで明治二十年頃になりましたから、明治天皇の侍講をしておつた元田永孚が教育勅語を作りたいということを考えて、これを井上毅に頼んだのです。そこで井上毅が作つたのが、これがいわゆる「朕惟フニ 我ガ皇祖祖宗 國ヲ肇ムルコト宏遠ニ 德ヲ樹ツルコト深厚ナリ」というあの教育勅語なのです。今でこそここで冷笑の語氣を以てそれを言うことができませんが、もとはこういうふうにして半分笑ひ話にしながら言つたら、それこそ反動団体におんなぐられるほど、これは有難いものだつたわけでありす。そこで明治の三大詔勅というのは、先ほども申した通りに五箇條の御誓文も、横井小楠の共和思想が入つておるのであります。それから最後の教育勅語も、横井小楠の弟子の井上毅と元田永孚とが持えたものでありますが、だんだんあとになつて來るほど、アメリカ流のいいところはなくなつて參ります。それであの教育勅語を讀んで見ますと、「庶民志を遂げ」どころじやない、この教育勅語に至つては、「ナンジ臣民 克ク忠ニ克ク孝ニ」でありまして、もはや庶民というものはここでは認められておらん、臣吉田茂ということになつておるのであります。（笑声）それどころじやない、「國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ」という文句がある。これは井上毅が書いたのでありますが、元田永孚はそれが氣に喰わん。そこで國憲を



重んじという文句を削ろう、天皇が国憲を重んじ、国法に遵うなんというのではないから、これは削ろうということになつた。併しまあ明治天皇に伺つて見ようじゃないかというので、その草案を出したところが、明治天皇が暫く手許に置いて見ておくからというので、お手許に留めおかれた。それから二、三日してから、国憲を重んじ国法に遵いというあの文句はあつたほうがいいというのでそれで残されたという事であります。あのワシントンに非常に傾倒しておつた横井小楠の弟子でありながら、だんだん世の中が變つて来ると、「国憲ヲ重シ国法ニ遵ヒ」というような文句までも削ろうとしたのでありまして、その点これを残せよといわれた明治天皇の方がはるかに民主的であつた。

## 四

それからこれはちよつとワシントンのことでなく、ジェファアソンのほうであります。御存じの通りアメリカの独立宣言は、あれは三代目の大統領ジェファアソンが書いたということになつてゐる。尤も近頃はそうじゃないという説も出ておりますが、草稿が残つておりますから、大体においてジェファアソンが書いたものに違ひないであります。それからあれはルツソーの民約論から非常に影響を受けて書いたものだということも、これも大体通説である。私なんかルツソーの民約論と合せて読んで見て、そうに違ひないと思ひますが、併し確か東大の高木八尺博士の研究によりますと、あの頃ルツソーはアメリカで読まれておつた形跡がないから民約論じゃない、ホツプスの影響だということであつたと思ひます。併しイギリスに反抗して独立の宣言をするというのに、イギリスのホツプスのみを手本にするというようなことは首を傾けねばならぬし、それから文句が非常にルツソーの民約論に似ておりますから、私は如何に学者の研究があろうとも、あのアメリカの独立宣言というものはルツソーに源流を発するもののだというふうに思つております。そうして福沢先生が慶応二年に出した西洋事情という本の中では、独立宣言の第二パラグラフのところがこういうふうに訳されてゐる。「天ノ人ヲ生ズルハ、億兆皆同一轍ニテ、之ニ附与スルニ動カス可ラザルノ通義ヲ以テス。即チ其通義トハ、人ノ自カラ生命ヲ保シ、自由ヲ求メ、幸福ヲ祈ルノ類ニテ、他ヨリ之ヲ如何トモス可ラサルモノナリ。」と、あの独立宣言をこういう風に訳されてゐるのであります。それで不注意に読みます



と、先ほど藤井先生のおつしやつた、「天は人の上に入を作らず、人の下に人を作らずと言えり」という言葉、これは福沢先生の言葉のように思われおりますが、實際は福沢さんはジェファアソンの独立宣言を一ぺん西洋事情の中で右のように直訳して、それをああいふ言葉にちじめたのでありまして、福沢諭吉のあの言葉も、やはりこれはワシントンではありませんがジェファアソンから出てゐる。それから大隈重信、これは早稲田大学の創立者であります。この人は若いとき長崎へ出て、英語の塾を開いてABCを教えておつた。のちにタカジアスターゼを造つた高峰讓吉博士は大隈重信先生からABCを習つたということを高峰博士自身も書いておりますし、大隈侯の談話にも載っておりますが、大隈さんが長崎に出たときの英語の先生は、これも藤井先生の話に出ましたが、フルベツキという人でありました。本当はこれはフルベツキというのはおかしいので、英語で言えばハアベツクなのでありますが、オランダ人ですからフルベツキと日本で言つております。このフルベツキから大隈さんはアメリカの独立宣言やアメリカの憲法を英語で習つておるのであります。この間早稲田大学の七十五周年のときに、政治学の教授吉村正博士がアメリカのどこかの大学に行つたところが、そこに何とかいう老教授がおつて、その人が日本に行つて大隈さんに会つたときの思い出話をした。そうして大隈さんが、自分は若いとき長崎に行つて、フルベツキからアメリカの憲法や独立宣言を英語で習つた、それがためにのちになつてから民権論を起したり、明治の憲法を作つたりするのに非常に関心を持つた、そうしてジェファアソンがコロンビア大学を建てておりますように、自分は早稲田大学を建てたという話をしたといふことを、その何とかという老教授に聞いたといふので、吉村君が新聞に書いておりましたのを興味深くよみました。ところが實際はそれはアメリカ迄行つて聞くまでもないので、グリツフィスといふ宣教師がりましたが、そのグリツフィスの書いたフルベツキの伝記を読んで見ますと、その中にフルベツキが明治の初めにアメリカ人に送つた手紙の原文が引用してあります。その手紙に、自分が憲法や独立宣言を教えた弟子には、大隈八太郎や副島種臣がいるということが書いてあるのでありますから、大隈さんが民権運動を起したりするのには、やはりジェファアソンの影響があるといふことは、これはもう間違ひがないのであります。

それからまだほかにもワシントン、ジェファアソン、或いはアメリカの政治の影響といふものは、いろいろ明瞭に



現われておりますが、私は一番面白いのは明治二年に北海道に共和国ができておることだろうと思う。明治三十二年でありましたか、フィリッピンが独立戦争を起したときに、アギナルド將軍が大統領になつてフィリッピン共和国というものを作つた。このフィリッピン共和国こそ東洋にできた最初の共和国であるという宣言を発表しておりますが、これはそうじゃない。フィリッピン共和国ができるよりも三十年前に、北海道に共和国ができておる。丁度今日ここに放送局の高橋邦太郎君が来ておりますが、これは高橋邦太郎君が専門のように調べております。榎本武揚が江戸城受授の後北海道ににげて行きました、実は北海道だけを徳川家に貰いたいということを政府に言つた。政府はこれを受知する筈がない。くれないなら、一つここでアメリカ流の共和国を作ろうということで、それから大統領選舉を行つておるのであります。大統領選舉ばかりじゃない、陸軍長官も、海軍長官も、國務長官も、それからその次官まで選舉をやつておるのであります。選舉という言葉はまだありませんから、その時分はみな入札といつておるのであります。ハ、笑声、それで大統領には榎本武揚が當選した。大統領と言わないで總裁と言つておるけれども、併しそれはプレジデントの訳字なのです。副大統領には松平太郎が當選しておる。それから陸軍長官には大島圭介が當選してあります。そうして陸軍次官には、あなた方がチャンバラものでよく名前を知つておる三多摩の土方歳三が當選してある。海軍次官には荒井郁之助が當選してあります。こうして次官まで選舉を行つておるのであります。これもやはりアメリカの影響なのであります。そうして明治二年に丁度北海道に来ておつた各国の領事に対して、これは北海道共和国と稱するといふ通告を正式に發しておるのでありますから、外交処置までとつてゐるので共和国が本當にできたのであります。併し官軍から攻められて、六カ月も経たないうちにはかなくこの共和国は消えてしまつておりますが、（笑声）殊に明治になりましたからは、日本に共和国ができたなどといふことは非常に嫌ひまして、そこでこの史料を湮滅しようとして、この史料については誰も余り書かないし、これに触れるのもいやがる。実は前に明治文化研究会で藤井先生に、北海道共和国の講演をして下さいといふことを頼んだことがあるのであります。昔若き教授の時分には、スターリンに似て非常にレジスタンスの精神を發揮されました藤井先生が、いや、それは困る、というのでお断わりになつたくらいで、（笑声）北海道共和国のことが、研究家の認識の中から殆んど湮滅してある



のであります。私なんかも大正十四年頃に、吉野作造博士の紹介状を貰つて、北海道の図書館を調べに行つたことがあります。あそこに、今は亡くなりましたけれども、岡田健蔵という人がおりました。とにかく函館の図書館が北海道共和国の史料を一番沢山持つておるといふことでありますから、そこへ行つて史料を見せて貰いたいと言いましたところが、丁度岡田さんが旅行中でありましたし、留守の人は見せてくれない。それほど北海道共和国というのはタブーであつて、みんな触れるのを恐れておつたのであります。併し戦後になりましたからは、真理の研究のためには何ものも邪魔するものはないのでありますから、私などは年をとつて雄心消磨し尽しましたので、今後北海道共和国の研究をやらうという気持はありますが、若き皆さんによつて、わが国にも明治二年にすでに日本の一角に共和国ができておつたといふことについて、十分立派な研究が出て来ることを、私は期待するものであります。